

鹿 2 鹿の跡を尋ねて = = = 猪・鹿・狸より

猪とちがって鹿の方は、界限ではもう何処の山にもいなくなった。数年前までは、鳳来寺山にたった一ついたと聞いたが、それも捕ってしまって、よくよくいなくなったと、狩人も言うていた。

その鹿がここ三、四〇年前までは、今から思うと嘘のようにいたのである。狩人に追われて、人家の軒や畑を走る姿を見ることは珍しくなかった。まだほんの子供の時分であった。軒端に箆を敷いて、ボトウ（日向ぼっこ）をしているところへ、狩人に追われた鹿が、前の畑から屋敷へ上る坂路を駈けて来て、坐っていた箆の端を蹴散らして、背戸の山へ駈け抜けたことがあった。その時傍らに祖母が坐っていた。あっと言うて、自分を抱える暇さえなかったと、後で笑ったことを覚えている。

家の縁側から見ると、南の方遙かに、舟着の連山が立ち塞がって、雨上がり



横山より舟着山

の後などは紫色の澄んだ山の腰に、白く水の落ちるのが見えた。あそこが舟着の百俵窪（ひゃくたわらくぼ）で、一窪で米が百俵取れるげななどと言うた。その手前の、僅かばかりの盆地に、大海、有海の二つの部落が展けていた。西に低い山を負って、晴れた日には人家の瓦屋根から陽炎が上がるのが見えた。

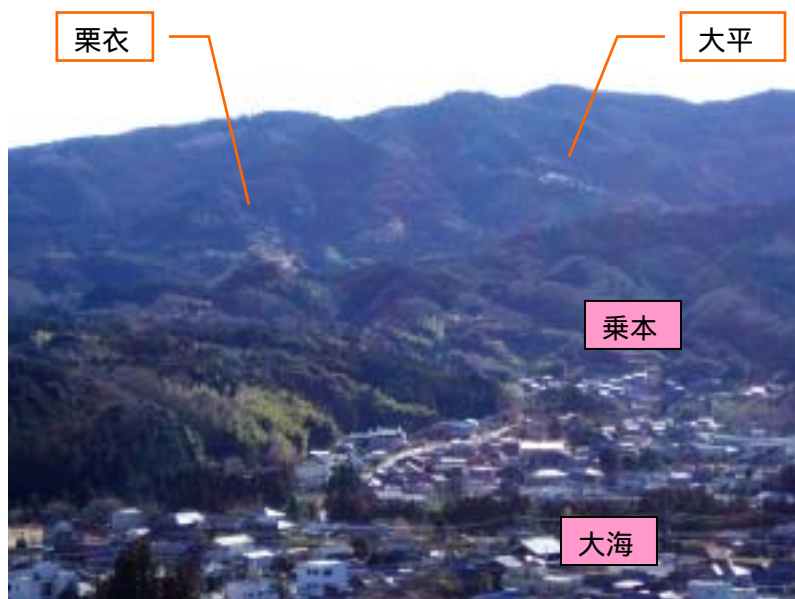
鉄道が通じて、大海の村へ長篠駅が出来てからもう三〇年そこそこになる。それより数年前までは駅から数町離れた墓場続きの原に、まだ鹿のいた話がある。うっかりはいった狩人の目の前へ、三又の角を揃えた雄鹿ばかりが四つ駈けて来た時は、うっかりしていただけについ泡食って、遁がしてしまったと言うた。

大海の南隣、有海の篠原（しのんはら）は、今でこそ見渡す限り桑園になって、長篠戦記に勇名を遺した鳥居勝商が憤死の跡なども、その中に埋もれてしまったほどであるが、以前は西隣の川路の原とともに、またとない鹿の狩場であった。どんな不猟の時でも、そこへ行けばかならず一つや二つは獲物があったと言うた。山は何れを見ても低い赤禿山の続きで、何処に鹿がいたかと思う

ようであるが、また、一方の話では、そこの大窪の谷で山犬が子を産んだことがあったと言った。しかもそのおり、赤飯を炊いて、近所の女房たちと一緒に見舞いに行ったと言う女が九十幾つではあったが、まだ達者でいたことを考えると、村の姿はわれわれが想像も及ばぬほど早く変化したのである。

有海から東へ川を渡ると、舟着山の麓で、麓に沿うて展けた部落を七村（ななむら）と言った。大平（おおびら）、栗衣（くりぎの）、市川（いちかわ）、日吉（ひよし）、吉川（よしかわ）、久間（ひさま）、乗本（のりもと）といずれも小さな部落で、山と山の間には散らかっていた。界隈の村から、いつも悪口の的にされたほどの僻村

だっただけに、鹿は至る処に出た。中にも最も山奥の、大平、栗衣では、狩人が鉄砲舁いで通るたびに、村の衆が出て来て、お狩人様どうか鹿の奴を撃って下され、頼むげななどと言った。もちろん悪口ではあったが、頼まれたのも事実だった。狩人が鹿一つ捕って、お頼う申しますと



舁ぎ込んで行けば、酒一升を出すのが普通であったと言った。何れもひどい山田を耕していたが、畑の少ない米处で、しかも植え付けたばかりの稲を、鹿が出るたび片ッ端から抜き取って喰ってしまったのだから、あるいはこんな不文の慣習があったかも知れぬ。

孝太郎は、鳳来寺山にいたのを最後に鹿がいなくなったと書いていますが、二〇年ほど前から再びこの辺りでも見かけるようになりました。私が子供の頃は、動物園にでも行かなければ、鹿など見ることは出来なかったのが、今では、鹿を見かけるのがそれ程珍しいことではなくなりました。農作物に対する被害は、猪や、サルに比べれば少ないようですが、植え込んだ苗木の芽を食べてしまったり、幹の皮をかじって枯らしてしまったり、林業への被害はかなりあるようです。

今まで保護されていましたが、最近、猪とともに駆除の対象になっていて、この近くでも毎年二、三頭は捕られているようです。